

# 郷土室だより

第159号

平成29年11月30日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 29-035

## 『江戸・東京の川Ⅱ中央区の川』(八)

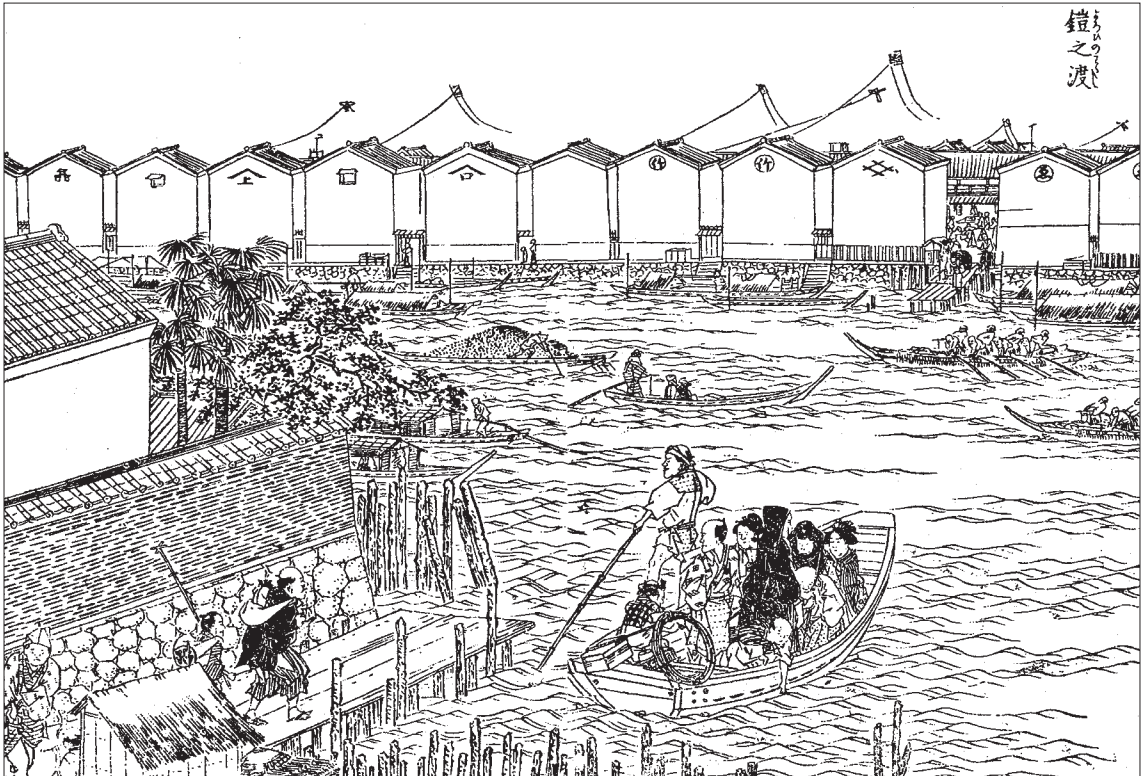
前号では、日本橋川左岸の北鞘町河岸から末広河岸まで考察しました。魚河岸では、本船町を中心に長浜町、按針町、小田原町一・二丁目の五つの町が、日本橋魚市場を形成していたことを確認。今回は、鎧河岸と北新堀河岸、さらに右岸の河岸について見ていきます。

### ◇鎧河岸

思案橋から箱崎橋の間、小網町二丁目と同三丁目の川沿いを、俗に鎧河岸と呼んでいました。現在の町名では日本橋小網町9番・8番・1番にあたります。

鎧河岸は、奥川筋船積問屋(※)や米を扱う問屋が多く、市場として活況を呈していた場所。明治五(一八七二)年まで、小網町二丁目と同三丁目の間から対岸の南茅場町を結ぶ渡船Ⅱ鎧之渡があり、その周辺に船積問屋が多く集まっていたのが大きな特徴です。

※奥川船積問屋 寛文中(一六六一〜七三年)から幕府から、



鎧之渡 (『江戸名所図会』より)

特許（中川口で手形を差し出し、自由に通船できる）を得た問屋。十組奥川積問屋と称し、三六人に限定。関八州・奥羽・越後・信濃などに向けた荷物や日光御参社・川御普請・諸侯参勤交代などの荷物

輸送を独占した（三六軒は区内に集中）。

明治一〇年九月一〇日、思案橋より箱崎橋までの河岸地が鑑河岸と正式名称になりました。

#### ○小網町二丁目

小網町二丁目は、堀江町入堀（東堀留川）の南側にあり、川に沿って細長く南北に続いていました。『寛永江戸図』に小網町二・三丁目「はんぢやう丁（番匠町）」、『寛文新板江戸絵図』では「小網町二丁目」とあります。

思案橋南詰の横丁は貝杓子（板屋貝・帆立貝などの殻に竹や木の柄をつけたもの）を商う店が多かったことから、貝杓子店と俗称。鑑之渡があった周辺は、昔は大きな入江だったと伝えられ、源義家が奥州征伐の際に通過した場所との伝説があります。「源義家が下

総国に渡ろうとした時に、暴風に

わかに吹き起こり、船は覆らんばかりであった。義家はそのため鑑を水中に投げ水神の怒りを鎮め、ようやく事なきを得て、無事に下総国へ渡ることができた。その跡を呼んで鑑が淵と称する」というもの。

河岸地には奥川筋船積問屋が多く、府内にある問屋三六軒のうち町内には二二軒あり、多くの高瀬舟が往来して、水面が埋まるほどの活況を呈していました。『新撰東京名所図会』にも「水運の便利を有するを以て、廻漕もしくは運送を営む者多く」とある通りです。

『江戸買物独案内』（文政七・一八二四年）には奥川筋船積問屋の蔦屋宇八ほか七店。ほかに鯉節問屋の伊勢屋、下り傘・線香問屋の大坂屋、水油仲買の伊勢屋、瀬戸物問屋の川越屋、足袋股引屋のつちや、竹皮問屋の伊勢屋、かまやもぐさ卸問屋の釜屋、貝杓子・水納柄杓・木杓子問屋のさかみやなどの名前が見えます。

『江戸十組問屋便覧』（以下、『便覧』（文化一〇・一八一三年）の問屋数は二四軒で、奥川筋船積問屋が八軒と下り傘問屋が四軒。ほ

かに線香問屋四軒、水油仲買問屋二軒、煙草問屋二軒、鯉節問屋一軒、その他三軒とあります。

『諸問屋名前帳』（以下、『名前帳』（嘉永四・一八五一年）には問屋数が二五軒で、米関係の問屋が多いのが特徴。地廻米問屋一軒・脇店八カ所組米屋二軒・春米屋三軒。下り水油問屋一軒・地廻水油問屋一軒・水油仲買二軒と水油関係問屋が四軒、ほかに住吉組荒物問屋五軒、茶問屋・糖問屋・炭薪仲買・藍玉問屋・紺屋・下り蠟燭問屋・堀留組畳表問屋・小問物問屋各一軒、その他一軒とあります。

に位置。同一・二丁目と同様に奥川筋船積問屋が多いことが特徴です。『府誌』に「船積問屋多く」とあり、『新撰東京名所図会』にも「水運の便利を有するを以て、廻漕もしくは運送を営む者多く、従って諸問屋またはなはだ多し」としています。箱崎川沿いの「行徳河岸」周辺には、地廻り塩問屋が多く集まっていました。

『新撰東京名所図会』に北海廻漕店、石油問屋の三明商店、石油水油其他問屋の島田新助、石蠟々燭製造其他問屋の紀伊國屋、直輸出入商の鈴木倍次郎、布屋両替店、茶商の中村正太郎、洋酒食料品ミルク問屋の塩谷吟光堂などの商店名があり、その一方で、日本海上

『名前帳』では問屋数が三一軒と減少し、米関係や水油関係の問屋が多く見られます。地廻米穀問屋四軒・脇店八カ所組米屋四軒・春米屋三軒とあり、下り水油問屋二軒・地廻水油問屋三軒・水油仲買が二軒あり、ほかに竹木炭薪問屋三軒・炭薪仲買一軒、糖問屋二軒、

東京支店、三十九銀行支店、後銀行、実業銀行など、銀行や金融関係の会社の進出が伺えます。

#### ○小網町三丁目

小網町三丁目は、同二丁目の南

三軒・炭薪仲買一軒、糖問屋二軒、

下り塩問屋・地廻り酒問屋・両替屋・繰綿問屋・藍玉問屋・地掛蠟燭屋が各一軒とあります。

『新撰東京名所図会』に次の商店名を挙げています。

廻漕業の伊藤萬助、運送その他の中村組廻漕部、貨物廻漕業並旅館の伊勢喜、海草荒物問屋の駒木銀三郎、塩醬油荒物商の濱口吉右衛門、醬油問屋の高梨仁三郎・岡田商店、食塩商の山本東造、油商の伊藤交太郎、砂糖商の大島茂七、砂糖問屋の川喜多八右衛門、乾物商の西尾惣助、水油肥料食塩の鈴木茂兵衛、傘履物荒物問屋の稲田、鍋釜鉄物問屋の釜屋、銅鉄商の斎藤六兵衛、石油機械油其他の根本良平、などです。

小網町三丁目（鹽河岸の一部を含む）は、関東大震災後の帝都復興区画整理事業で、昭和八（一九三三）年二月一日に小網町二丁目に改称。

◇北新堀河岸

湊橋と豊海橋間の北新堀町の川沿いを、俗に北新堀河岸と呼んでいました。現在の日本橋箱崎町1・

2番にあたります。東側の永代橋西詰広小路には、御船手組屋敷・御船蔵が置かれ、通行する船を監視していました。

この河岸地は、塩問屋が多かつたことが特徴です。江戸で消費される塩の大部分は行徳産の地廻り塩で、その他は三田尻・赤穂などの「下り塩」でした。文久（一八六一〜六四年）ころの下り塩問屋は、廻船下り塩問屋四軒と一人の仲買がありました。問屋は四軒とも北新堀町で、仲買は南新堀町三軒、南茅場町四軒、箱崎町二軒となつています。

○北新堀町

北新堀町は、箱崎町一丁目の南東に続き、南は新堀川に面し、北は関宿藩久世氏中屋敷、御船手組屋敷、東は永代橋西広小路へと続きます。新堀川の北に位置することから町名が付きました。

御船手組屋敷は、明暦三（一六五七）年の御船蔵、寛文五（一六六五）年に御船見番所（大川・新堀川を往来する船の見張所）の設置に伴い設けられたもの。この施設ができたことで、町の一部が対岸の南新堀二丁目の東側に移転し

て、北新堀大川端町が起立しました。

『続江戸砂子』に「塩問屋と酒問屋が多かつた」とあり、『江戸買物独案内』にも廻船下り塩問屋の秋田屋、下り塩仲買問屋の伊勢屋、干鯛・粕油問屋などの名前が見えます。

『便覧』に問屋数は一六軒。下り塩問屋五軒と塩問屋が四軒あり、ほかに干鯛・粕問屋三軒、生布海苔問屋・水油仲買問屋・醬油酢問屋各一軒、その他一軒。

『名前帳』では、問屋数が一三軒になっていますが、廻船問屋や塩下り物を扱う問屋も多く、廻船問屋五軒、下り塩問屋三軒、乾物問屋・下り鯉節問屋各一軒です。

『府誌』に、河岸地「日本橋川の北岸に在り、東西二町六間、南北四間、面積五〇四坪、雑業多く、商戸之に次ぎ、工手又之に次ぐ」とあり、『新撰東京名所図会』に

は、海陸運送業の伊勢屋、鍋釜問屋の釜浅商店、酒類商の柴田伴吉、米穀商の鉄屋などの名前が見えます。明治元（一八六八）年に設立された開拓使物産売捌所の建物を利

用して、日本銀行が設立されました。建物は明治一三（一八八〇）年竣工、同一六年四月に開業。同二九（一八九六）年に現在地に移転するまで、一九年間この場所で営業していました。

次に、日本橋川左岸の西河岸について考察します。

◇西河岸

一石橋から日本橋の間、西河岸町の川沿いを西河岸と呼んでいました。現在の八重洲一丁目18番と日本橋一丁目1・9番にあたります。

河岸地には、樽木屋が多く「樽木河岸」、また砥石屋が多いことから「砥石店」・「砥石河岸」、他にも河岸地の東が「東河岸」、西が「西河岸」と呼ばれるなど、俗称が多い河岸地でした。

『府誌』に「桧木河岸、一石橋の左にあり、面積一一五六坪、江戸鹿子・江戸砂子共に樽木河岸に作る、商六三戸、職工一〇戸、雑業五〇余戸」とあります。明治一〇（一八七七）年八月八日に、西河岸

は正式名称になりました。

○西河岸町

西河岸町は、西は外濠に面し、東は通一丁目と接しています。日本橋川沿いは、俗に西河岸と呼ばれ、土蔵が連なっていました。日本橋の西に位置することから、町名が付きました。大通り（現・中央通り）に並行して走る西通りの東側を東河岸、その西側を西河岸と呼んでいましたが、のちに西河岸に統一されています。

『名前帳』に問屋数は一七軒。魚河岸に隣接していることから肴問屋が四軒。ほかに炭薪仲買七軒・竹木炭薪問屋一軒、両替屋二軒、春米屋・下り蠟燭問屋・住吉組荒物問屋が各一軒です。明治以降、街に新たに金融関係の会社が進出し始め、『新撰東京名所図会』には東京火災保険株式会社、濱田銀行などの名前も見えます。

西河岸町（西河岸および城辺河岸の一部を含む）は、関東大震災後の帝都復興区画整理事業で、昭和三（一九二八）年二月一日に、呉服橋一丁目と通一丁目に改称されました。

◇元四日市河岸

日本橋南詰から日本橋蔵屋敷、江戸橋蔵屋敷と川沿いに江戸橋の南詰まで続く河岸地を、俗に元四日市河岸と呼びました。現在の日本橋一丁目9・19番にあたります。『府誌』に、河岸地「元四日市町の北側、日本橋川に沿う。面積一三五坪五合五勺、商五九戸、工三戸、雑業一九戸」とあり、『新撰東京名所図会』には「四日市魚市場は日本橋魚市場の一部で、区域は元四日市・青物町・本材木町一丁目。大半が魚問屋で、みな多くの塩鮭を扱う」とあります。

明治九（一八七六）年に旧木更津河岸・旧日本橋蔵屋敷の河岸地は、四日市河岸と正式名称が付きました。

○元四日市町

元四日市町は、日本橋川に沿って日本橋南側から江戸橋の南に続く両側町。家康が江戸入りの際、小田原の曾我小左右衛門らを移住させて、万町・青物町とともに小田原から町が移されて成立。かつては四日市場村と呼ばれ、四日ごと「市」が立ったと言われている

ます。もとは日比谷入江に流入する平川の左岸にありましたが、江戸城の築城のため廓内から現在の場所に移転。

明暦三（一六五七）年の大火後、本町と万町の商家が霊岸島に移され、元地は元四日市町となって広小路（火除明地）になっています。川沿いには土蔵が築かれ、土手蔵と呼ばれました。石倉で屋根に芝が植えられました。後に瓦葺きになっています。この土手蔵は、塩物肴類の倉庫として利用されました。

寛文八（一六六八）年に広小路に売場設置の許可があり、小間物屋五二・古本屋七・占卜六・植木屋三・その他三九、合計一〇七軒の床店が立ち並びます。一帯は江戸橋広小路（※）と呼ばれ、江戸で有数の繁華街になりました。

『江戸買物独案内』に鯉節塩干肴問屋の伊勢屋、諸国茶問屋の榛原屋、織帯地・御詠物の近江屋、足袋股引問屋・小売の筒屋などの名前があり、河岸通りには書物問屋の桂林堂・慶寿堂、印判・板木師の豊島久吾、齒磨粉・宿酔食中り薬屋・煙管師の紀伊国屋、菓子屋

の大黒屋、紙煙草入・鼻紙入の米屋、煙管所の伊勢屋、磁石類・眼鏡師の加賀屋、熱海温泉の湯屋、広小路に鼻紙入・煙草入の田中屋などの名前があります。

『名前帳』に問屋数が一三軒。肴問屋が六軒あり、魚河岸業務の一部を担いました。ほかに地廻米穀問屋三軒・脇店八カ所組米屋二軒、廻船問屋一軒、団扇問屋一軒。明治二（一八六九）年に、日本橋蔵屋敷・活鯛屋敷、江戸橋広小路之内御免家作地を合併。

また、同一（一八七八）年には錦町の一部も合併しています。元四日市町（四日市河岸の一部を含む）は、関東大震災後の帝都復興区画整理事業で、昭和三（一九二八）年二月一日に、江戸橋一丁目と通一丁目に改称されました。

※江戸橋広小路 正徳二（一七一一）年一月、日本橋と江戸橋の南詰から日本橋にかけて広小路が設置。明暦大火後の防火線の一つで、四日市町の一部を取り払って設けられた広小路です。

川沿いに東西二町半にわた

り高さ四間に石を積み上げ、屋根附芝蔵を設けて防火設備としました。土手蔵前の広小路には、九尺四方ほどの小屋（床店）が左右に四十数軒も並んで雑貨を売り、人通りの多い喧噪に満ちた盛り場をなしていました。附近には塩鮭塩鱈類を取めた土手蔵や蜜柑・果物・前菜の間屋、生鯛屋敷、水茶屋や講釈場、楊弓場や牛置場などが置かれ、非常に賑やかな街区を形成。

もともと床店は薄資で開業できる商店でしたが、この場所ですで店を出せる業者は一〇七軒と定められていました。元文元（一七三六）年の『床店連判帳』には、小間物屋五二人、古本屋七人・占卜六人・植木屋三人・その他三九人の合計一〇七人とあります。『江戸惣鹿子名所大全』に「塩物屋が多く、夏季は西瓜の市が毎日たつ」とあり、『江戸砂子』にも「今も瓜・西瓜・冬瓜・蜜柑・大根などの前裁もの、あるひは門松・正月かざり物の市立。爰に諸方への

かし舟あり」とあります。

広小路の一角に魚会所（幕府への納魚を専門に取り扱っていた）があり、明治初年には前島密が駅通寮を設置する際に事務所として使用され、わが国郵便の発祥地となっております。

#### ○日本橋蔵屋敷

日本橋蔵屋敷は、日本橋南詰のすぐ東側、日本橋川沿いにあり、東に土手蔵が隣接。明暦大火後、防火を目的とした土蔵が日本橋と江戸橋間の川岸に建設。六・七尺ほどの石垣が築き上げられ、土手蔵と呼ばれました。元四日市の商人たちは、塩鮭などの保存庫として利用。

『御府内沿革図書』に「享保一七

（一七三二）年蔵屋敷できる」とある通り、以前は土手蔵だった場所が町屋に変わったのです。『名前帳』には、両替屋が一軒あるのみ。

明治二（一八六九）年四月に、元四日市町に合併。

#### ○江戸橋蔵屋敷

江戸橋蔵屋敷は、日本橋川沿いの江戸橋南詰の西側にあり、西に土手蔵が隣接。『御府内沿革図書』

には「安永四（一七七五）年に土手蔵が蔵屋敷になる」とあります。以前は日本橋蔵屋敷と同様に、土手蔵が町屋になった場所です。

『江戸買物独案内』に釘鉄銅物問屋・打物問屋の今津屋の名前が見えます。『名前帳』には問屋数は九軒で、炭薪仲買四軒、堀留組畳表問屋・版木屋・釘鉄銅物問屋・大工道具打物問屋・春米屋各一軒となっております。

明治二（一八六九）年四月に、木更津河岸地などを併せて錦町と改称。その後、同一年には元四日市町と本材木町一丁目に分割されました。

#### ◇木更津河岸

江戸橋際の河岸地に木更津河岸があり、江戸・木更津間の水上交通に大きな役割を果たしました。『府誌』に、錦町の木更津河岸「江戸橋の右に在り、木更津往復の船

あるを以て、この名あり、面積七一九坪二合五勺」とあります。

慶長一九（一六一四）年の大坂冬の陣に出陣した木更津村の水主二四人の内、十二人が戦死。戦い

の後、残り二人の水主は兵糧米の廻漕にも尽力し、合わせて遺族の救済を嘆願。その結果、幕府は木更津村付近の城米二万石余の運漕権と、旅客輸送のため本船町河岸の使用権を与えました。その後、元禄六（一六九三）年に本船町との間で紛争が起き、訴訟の結果、木更津河岸は移転することになり、対岸の江戸橋南袂西寄に一四三坪余の船着場を拝領し、新たな木更津河岸となりました。

上総木更津と江戸間は陸路で二里、海路は一三里。安房・上総の人たちが江戸・神奈川方面へ向かう際、多くの人が海路を利用しました。船は四斗俵五百俵積み、一二〇〜三〇石程度の規模で、木更津船と呼ばれました。船の舳の水押が円みをおびていて、他の船との識別も容易でした。江戸湊に出入りする船舶は、木更津船と分かると、避けて通つたと云われています。

木更津河岸は、明治に入り官有の河岸地となって、名称が四日市河岸に変更。その後、昭和四一（一九三九）年九月一二日に廃止されています。

## ◇南茅場河岸

西は牧野筑前守邸に接し、東は亀島川に面する南茅場町の川沿いを、南茅場河岸と呼びました。現在の日本橋茅場町一丁目1番と同14番にあたります。

『延宝江戸方角安見図』に「せと物、せとものいろいろ」河岸に「かた木いろへ」とあり、『嘉永三（一八五〇）年改正近吾堂版切絵図』には「カシクラチ」とあります。河岸地は広く、下り荷を扱うには絶好の場所です、下り酒問屋が多かったのが特徴です。

『府誌』に、河岸地「日本橋川の南岸に在り、東西三町六間三尺、南北一六間、面積二二三坪二合九勺、商売多く間に工匠雑業あり」とあります。明治九（一八七六）年、茅場河岸が正式名称となりました。

## ○南茅場町

南茅場町は、鎧之渡のあった場所から日本橋川沿いに霊岸橋際まで続きます。この南茅場町を含めた八町堀周辺は、もともと海だった場所。この地区の陸地化は、慶長一七（一六一一）年開始の第二

次天下普請で、八町堀舟入堀が造られたことから急速に進み、寛永一六（一六三九）年頃までにはその原形ができています。そして、江戸城の拡張工事の際に、神田橋外の茅商人が楓川の東側の埋立地に移り、茅場町を起立しました。

古くは鎧島という寺地だったとも伝えていきます。『寛永江戸図』に「かやは町」「町や」とあります。明暦大火後に、寺の多くは下谷・浅草方面に移されて、跡地は町屋に替わりました。同時期に、茅商人は本所に移転して、本所茅場町となり、日本橋川に面する場所は俗に「茅場の跡」と呼ばれました。

日本橋川沿いの河岸通りは、舟運の便に富むことから多くの問屋が集中。とくに酒問屋が多く、元禄期に府内の問屋は一二六軒を数えました。その内訳は、茅場町組が四八軒、呉服町組三四軒、瀬戸物町組三〇軒、中橋組一四軒とな

っています。

『楓川鎧渡古跡考』（弘化二・一八四五年）は、伊丹第一の酒問屋の小西屋利右衛門の他に、小西利作・鴻池太郎兵衛・紙屋八左衛門・小西惣兵衛・鴻池徳兵衛・鴻池栄

蔵・小西四郎兵衛・浅井藤右衛門など関西の大酒問屋の江戸店が軒を連ねています。

『江戸総鹿子名所大全』に大坂船問屋の利倉屋、勾当の初瀬、饅頭屋の塩瀬などの名前があります。また『江戸買物独案内』には、下り酒問屋や下り塩仲買問屋が多くあり、酒問屋の鴻池屋・小西屋ほか八人、塩問屋の西宮屋ほか三人。他に下り糖問屋、下り素麺問屋などの名前が見えます。

『便覧』の問屋数は四四軒で、「下り物」を扱う問屋が多いのが特徴。下り酒問屋九軒、下りぬか問屋四軒、下り塩問屋・下り傘問屋が各三軒、下りそうめん問屋一軒あり、ほかに生布海苔五軒、蕨縄問屋・醤油酢問屋各四軒、干鰯・粕問屋・麻苧問屋各三軒、船具問屋・水油仲買問屋各二軒、釘鉄銅物問屋一軒とあります。

『名前帳』には問屋数は四六軒。関東米穀三組問屋二軒・雑穀為登

組一軒・春米屋一軒、下り塩問屋四軒・地廻塩問屋八軒、下り酒問屋四軒。ほかに糠問屋二軒、竹木炭薪問屋二軒・炭薪仲買三軒、両替屋六軒、紺屋一軒、地廻水油問

屋・水油仲買各一軒、苫問屋二軒、住吉荒物問屋四軒、暦問屋・版木問屋・釘鉄銅物問屋・塗物問屋各一軒。

『新撰東京名所図会』に、新潟銀行東京支店、東京貯蓄銀行、東京電燈（株）日本橋配電所、房総鉄道（株）東京出張所、帝国海上運送保険（株）、東京興信所と西洋料理店の保米楼・弥生軒などの名前があり、明治期に金融関連の会社が進出、街の姿も様変わりし始めています。明治二（一八六九）年四月に、日枝旅所門前を併せています。南茅場町（茅場河岸の一部を含む）は、関東大震災後の帝都復興区画整理事業で、昭和八（一九三三）年八月一日に、茅場町一丁目に改称されました。

（菅原健二）